

反骨の政治家、中野正剛先生をしのんで斎行された顕彰祭



館 報

玄洋135号

令和2年1月1日

発行

一般社団法人
玄洋社記念館

郵便番号 810-0062

福岡市中央区荒戸三丁目

6番36号

西公園ハイツ201号

電話 (092) 762-2511

FAX (092) 762-2502

銅像建立35年ご遺徳継承を誓う 反骨の政治家

中野先生顕彰祭を斎行

玄洋社憲則

- 第一条 皇室ヲ
敬戴ス可シ
- 第二条 本国ヲ
愛重ス可シ
- 第三条 人民ノ権利ヲ
固守ス可シ

今号の主な内容

- ▽頭山翁はじめ玄洋社先覚を慰霊Ⅱ
2面
- ▽節信院で司書公らを追悼Ⅱ2面
- ▽連載「西郷隆盛は征韓論者にあら
ず」Ⅱ4面
- ▽賛助会員芳名録Ⅱ5面
- ▽初詣客待つ「令和の里」Ⅱ5面

戦争を膨張させる総理大臣、東條英機と対峙した福岡生まれの反骨の政治家、中野正剛先生の顕彰祭（中野正剛先生顕彰会主催）が、昨年十月二十六日、福岡市中央区地行二丁目、鳥飼八幡宮の中野先生の銅像前で斎行された。

同顕彰会会員や福岡市議会の玄洋社に政治を学ぶ議員の会会員、中野先生の崇敬者ら約五十人が参列。山内圭司宮司を祭主に祝詞奏上、玉串奉奠などの神事で中野先生のご遺徳を顕彰し、没後七十六年の慰霊をした。

同顕彰会の吉村剛太郎理事長は「中野先生は東條首相に対し意見を述べて弾圧を受けた反骨の士である。今日の政治を考えたながらご遺徳をしのびたい」と挨拶で述べた。

顕彰神事の後、同八幡宮の参集殿に場所を移し、直会（なおりい）が催された。初の参加者も交え、食事をしながら中野先生の偉業などを語り合った。

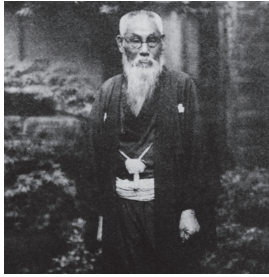
中野先生の銅像は、崇敬者らからの要望を受けて、中野先生の秘書を務めた玄洋社記念館の創設者、故、進藤一馬先生らを中心に建立された。

中野先生没後四十年の昭和五十八年に建設期成会が発足し、翌年の中野先生の祥月命日、十月二十七日に除幕した。進藤先生は生前「私は、命をかけてこの日本を守った偉人・中野正剛先生の魂を、われわれの守りとして大いに伝えていきたいし、みなさんも伝えていただきたい」と語っておられた。

玄洋社先覚を慰霊

菩提寺・崇福寺

厳肅に執り行われた玄洋社先覚の慰霊祭



頭山 満翁

頭山満翁はじめ玄洋社諸先覚の慰霊祭が昨年十月六日、玄洋社の墓地がある福岡市博多区千代四丁目の「崇福寺」本堂で厳肅に執り行われた。

一般財団法人「明道会」の主催。玄洋社員遺族は

じめ明道会関係者らおよそ二十人が参列した。同寺の岩月海洞住職を導師に、読経と参列者の焼香で供養した。

「明道会」の山崎拓理理事長は「今年も恒例の慰霊祭を無事終えることができた。明治、大正、昭和、平成、令和と続いてきた慰霊祭だが、私たちは、今後も頭山先生はじめ諸先覚が築いた玄洋社の伝統を受け継いでまいりたい」と挨拶した。

院信節 司書公を追悼

黒田藩の勤皇派弾圧事件、乙丑の獄で無念の最期を遂げた勤皇派家老、加藤司書公と勤皇党諸烈士の追悼会が、昨年十月二十五日、司書公の菩提寺の「節信院」（福岡市博多区御供所町）で行われた。

「加藤司書会」の主催で、約八十人が参列した。喜納浩一住職を導師に読経、祭文奉読があり、参列者が焼香して慰霊した。

清興では筑前琵琶旭会総師範、米村旭翔さんが「加藤司書」を献奏。司



筑前琵琶の献奏を聴く参列者

書公切腹の場に、文久三年「八月十八日の政変」で京を追われ大宰府に滞在していた三条実美ら五卿が、切腹差し止めの早馬を送る場面などを語った。

また、尺八琴古流明暗流会員が献笛、吟道宰都館の会員による献吟もあった。

追悼会で、毎回、興味深い講話を聞かせる明治維新史学会会員、力武豊隆さんは「志士たちのこぼれ話」の題で志士たちにまつわるエピソードを聞かせた。

そのなかで、十七歳まで加藤家に使えた女性の聞き書き（昭和九年訂正増補「加藤司書伝」）からは「（司書公は）剣道においても藩中これに敵し得る者なく、藩の剣道指南番といへども、三本に一本は必ず司書に打ち込まれてゐ（い）た」などのくだりが、紹介された。

筑前風濤録

〈19〉

頭山満と玄洋社

柳 猛直

試練の時代

一方、京都では長州藩による国事周旋が華々しく行われていた。これは藩内尊攘派や浪士たちの力を背景に展開されていたのだが、幕府は長州と「浮浪の徒」が朝廷を動かして危機をつくりあげているのだと判断していた。

長州藩には関ヶ原以来、徳川家に対する怨念があった。この機会にそれが燃え上がった形であった。

このころ朝廷から雄藩に対して国事周旋の要請が行われている。西国では肥後（細川）肥前（鍋島）筑前（黒田）等が受けていたのだが、これはどうも薩長だけに任せておいては、やり過ぎるというので均衡をとるための対応策であったようだ。

黒田長湊は、この春の大蔵谷回駕という事件で幕府から疑惑の眼で見られている時であり江戸と京都の間に立つて苦慮する。

黒田長湊は文久二年十月十八日、京都市。朝廷の意向を伺った上、十一月九日には江戸に着いている。

京都は尊攘の熱気がみなぎっていてテロも頻発していた。特に安政大獄の報復と和宮降嫁に関与した人たちがねらわれた。

文久二年七月、九条関白の家士であった島田左

題字は進藤一馬福岡市長

筑前琵琶保存会第55回演奏会

聞かせた「源平琵琶合戦」

筑前、薩摩の二面共演も



来場者が聞き入った尾方蝶嘉さん⑤と川嶋信子さんの演奏

の斬新な企画、構成によるこの演奏会は前評判が高く、会場は全国からの約五百人の来場者で埋まった。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」：平家物語のおなじみのフレーズで幕を開けた演奏会は、前半、後半の二部構成で、女性二人のナビゲーターの分かりやすい解説で進化した。

第一部のしんがりに登場した同会師範の寺田蝶美（ちようび）さんは、「俱利伽羅峠（くりからとうげ）」を演奏。力強く、また華麗な琵琶の音色と歌声に、会場から大きな拍手が湧いた。

寺田さんは、元、福岡市長で玄洋社記念館創設者の故、進藤一馬先生が、福岡市・松原で伐採寸前だった桜並木を救ったエピソードを題材にして琵琶曲「松原桜」を作詞、作曲して五十三回定期演奏会で披露している。

演奏会は筑前琵琶保存会教司の尾方蝶嘉さんと、薩摩琵琶の川嶋信子さんの二人の筑前琵琶、二面共演など、青山さん

薩摩琵琶二面共演による「知盛と義経」、「壇ノ浦の合戦」で締めくくった。

筑前琵琶と薩摩琵琶の共演は珍しく、息の合った二人の掛け合いは、来場者を魅了した。

薩摩琵琶の川嶋さんは、東京を本拠に、異種の芸能と共演するなど幅広い活動をする世界的に知られた演奏家。NHKの邦楽オーディションの場で、同じ受験者の尾方さんと出会い、お互いが力を認め合って、各所で二面共演を披露するようになった。



筑前琵琶保存会の青山旭子会主は、昨年十一月十八日、逝去されました。六十九歳でした。

同月二十五日、福岡市博多区の葬祭場で葬儀が行われ、お弟子さん方が琵琶の演奏で送られました。

青山会主は、玄洋社記念館主催の「廣田弘毅先生顕彰祭」で、長年にわたり筑前琵琶を献奏してくださいました。

近が暗殺され首は四条河原にさらされた。八月には目明しの文吉、九月に入って京都町奉行所の与力四人が斬殺された。

いずれも安政の大獄で尊攘志士の逮捕に働いた者たちであった。四人の与力は京都に置いては危ないというので江戸に呼び返す途中、石部の宿で刺客に襲われたもので首は京都の町中にさらされた。十二月には国学者の塙次郎（はなわ・じろう）が江戸で暗殺されている。塙は盲目の大学者・塙保己一（ほきいち）の息子で、暗殺の理由は幕府の命によって廃帝の事蹟を調べていたということであった。

これらのテロの下手人として土佐の岡田以蔵、薩摩の田中新兵衛など、人斬りといわれた殺人専門の連中があげられているが背後で彼らを使囃（しろう）した者がいたことは確かだ。

塙次郎の暗殺には伊藤俊輔（のちの博文）も関与していたという説がある。とにかく無政府といっている状態である。そんな中で黒田長濤も動きがとれない。

当時、〃尊王〃と〃佐幕〃は必ずしも対立する思想ではなかった。公武合体というのは尊王であり佐幕であった。長濤の場合も〃尊王佐幕〃であったから京都と江戸の間で方途に迷った。従って国事周旋といっても、何も出来なかったのである。それに引きかえ薩摩や長州の動きは華々しかった。長州は下関を通航する外国船を砲撃していたし薩摩は生麦事件の報復で鹿児島を襲ったイギリス艦隊と砲撃戦をやっている。（薩英戦争）

こうした攘夷の実績を背景に薩長両藩は京都での発言権を増してきた。もっとも、これは藩主の意思というより家臣団それも下級武士によって作りあげられた情勢に藩の首脳が乗っているという状態であった。

（この項続く）

西郷隆盛は

征韓論者にあらず

⑥

(昭和六十一年四月発行「玄洋」特別号外版より再録)

誤認の歴史を改めさす為

<5>

葦津珍彦

(前号から)

大久保利通は、岩倉、木戸などと同行して、明治四年十一月に、欧米外交のために日本を発つて、米国経由でヨーロッパ諸国を訪問して、明治六年五月に岩倉よりも早く帰朝した。かれは、欧米を視察して近代国家の建設について大いに学び思うところがあった。その私信等によれば、とくに当時、勢威隆々として発展しつつあるドイツ、プロシヤの宰相ビスマルクに深い感銘を受けた。その近代列強の間に處して「国家利益伸張」のために、時を見るに正確で敏活、勇気をもって「国家権力」を行使するビス

マルクを見て、近代国家建設の路線は、近代西欧列強の国家主義、特にビスマルク流を日本も学ぶべきだと思つたらしい。帰朝すると大久保は、不在中の政府で、自分が予想した政策と相反することが次々に進行しているのを見た。とくに大隈の行政に著しく不満だつたらしい。しかし黙つて、岩倉大使の帰朝を待つて進退を決するつもりだった。

当時西郷は、韓国特使になることを熱望して、副島・板垣等を同意させる説得に全力投球していた。勿論、大久保は西郷とは幾度か会っているが、その時点での大久保

は参議ではなく、公的にも私的にも対韓問題については討議した風がない。大久保が欧米の政情などについての新しい考えを話しかけても、西郷がほとんど興味を示さなかつたとのエピソードはあるが確証はない。ともかく岩倉帰朝まで二人の間では対決も討論もない。明治六年夏の情況では、大久保は岩倉の帰国を待つて自らの政治思想を大綱領として、留守政府の政治路線を根本的に改革するか、それが聞かれねば、しばらく自ら引退するとの考えだつたらしい見える。西郷の方は渡韓特使を熱望して積極的に動いていた。

そこに九月に岩倉が帰朝して、西郷特使の件については、「これを認めると、初めは礼節仁義外交の形をとつても、結局は流説のように征韓論へと発展必至」かと見て、断然反対を決心した。しかし西郷の熱望に反対して、前の決議を逆転させる実力者は、大久保のほかにはないと見て、強引

に大久保の協力をもとめた。初め大久保は躊躇(ちゆうちょ)として、回避したらしいが、岩倉の切望と約束の強さを見て、ここでは断然立つて、自らの信ずる政治原則を帝国政府の基本として確立するために戦闘すると決心した。

大久保の征韓論反対の意見書は、たゞ韓国政策是非との一時的政策論ではなくして、その根底において「日本帝国の国政の進路は、いかにあるべきか」との政治哲学を明示している。

大久保の有名な征韓反対意見書は、七ヶ条からなるがその要旨を下記する。(大久保の意見書については、徳富蘇峰著「大久保甲東先生」の書を見られたい)

大久保の新政治哲学

大久保は、初めから征韓反対を論ずる。

一、ご親政、日未だ久しからず、政府の基礎未だ確立せず―則ち一昨年のより今歳に至るまで、邊隅の頑民―騷擾(そうじ

よう)を起すにより止むを得ずして、鮮血を地上に注げる幾回ぞや。未だ俄に朝鮮の役を起すべからざるの一なり。

二、且現今、我国の外償五百万有余にして、其の償却の方法に至つて未だ確然たる定算なく―最大に憂うべき所の者にして、未だ俄に朝鮮の役を起すべからざるの上なり。

三、昨今の政府の諸業を起し、富強の道を計る、多くは数年の後を待ち、成功を期したる者にして―此の一年に依つて、ほとんど水泡にぞくし―後日に至り、おそらくは悔あらむ。

四、我国の輸出入―輸出の高、毎年大凡百万兩の欠乏あり、其欠乏は則ち金貨を以て、之を償却するものとす―益々輸出入の比例に於て大差を生じ、大に内国の疲弊を起さんは必なり―

というような論であつて、国家政府の経済財政の基礎が弱く、しかもそのために新政府の政治実力も全く安定していな

い。このような政治経済の現実を無視して、大きな軍事行動に発展する危険のある政策は、断じて行うべきでないとする。

七条の中で四条は、経済論なのであつて、こゝが他と全くちがう。五条以下が国際情勢の分析。

五では、北方のロシヤが樺太を據点として南進の勢いをしめしている。征韓の役が重大化する時には、干渉し來たる危険があるとする。

六では、英国。大久保の特に重視する点。英国は今や殊に強盛を張つて、虎視眈々(こしたんたん)としている。しかも日本の外債の多くは英国に依つてゐる。日本が征韓などで経済困難となれば、英国への経済依存度が加わり、それは必ずや英国の対日干渉をまねいて、その禍いは云うべからざるものとなる(註、当時の英帝国主義は、後進国への債権国となり、その債権を根據として強盛な海軍力を行使して植民地政策を進めていた)。

(次号に続く)

賛助会員芳名録

(令和元年10月23日受け付け分まで・敬称略)

▼法人・団体の部

【三万円】

玄南荘 (福岡市)

博多港管理株 (同)

▼個人の部

【二万円】

塚田 征二

(福岡県大野城市)

土肥 國夫

(福岡市)

小柳 政則

(同)

山座 和基

(同)

末永 正彦

(東京都)

川崎 賢治

(福岡市)

頭山 尚子

(立川市)

小野里耕作

(東京都)

進藤 学

(厚木市)

進藤 宏

(府中市)

初詣客押し寄せそう 「令和」の里太宰府市

皇居で天皇陛下下の「即位礼正殿の儀」が行われた昨年十月二十二日、福岡県太宰府市通古賀の西鉄天神大牟田線「都府楼前駅」では副駅名「令和の里」の命名と、「令和の里・都府楼前駅」と記した新しい駅名看板の除幕式が行われた。

同駅は、新元号「令和」の典拠となった「万葉集」の「梅花の歌」序文のゆかりの地、「坂本八幡宮」の最寄り駅(徒歩約八分)なのだ。

新元号が同年四月一日



新元号発表以来「坂本八幡宮」は訪れる人が絶えない

に発表されるや同八幡宮は一躍、脚光を浴び、観

光客が押し寄せた。同駅も乗降客が増え、副駅名の命名となった。副駅名が付いてから、さらに乗降客は増え「坂本八幡宮へ行く道順を尋ねられることが多くなりました」と駅員はうれしそうだ。

太宰府市は、天神様、菅原道真公を祭る太宰府天満宮の門前町で、年中、観光客でにぎわっている。中でも正月三が日の初詣客は二百万人といわれ福岡県一を誇る。同天満宮も「令和」発表を機に観光客、参拝客が一段と増えた。

東京の民間シンクタンクが同年十月に発表した令和元年の市区町村別魅力度調査で、同市は前年の七十七位から一挙に四十一位に駆け上った。今や同市全体が令和の里。同市は、舞い降りた好機を逃すまいと、観光施設の整備を進めている。

「令和」効果は衰えない。令和二年のお正月は、「令和」になって最初のお正月。同市には例年を超える初詣客が押し寄せることになりそうだ。

謹んで 新年のご祝詞を 申し上げます

子

令和二年元旦



HARADOI
HOSPITAL

原土井病院

理事長 原 寛

〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/



本社 〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六・一五三
TEL 092-2691-1067(代)
FAX 092-2691-1454
E-mail: info@shouten.co.jp

代表取締役社長 別府 壽信

株式会社 別府梢風園

造園・緑化 自然とコミュニケーション

(有)産企画 大江田 信
薬剤師 大江田 美子

〒818-0117 太宰府市宰府三丁目四十二
☎092-2192-4162・296

AKIRA
Oh, Fresh! Sea foods.



代表取締役社長 安部 泰宏
本社 福岡市中央区長浜3丁目11-3
電話 092-711-6601(代表)
関連会社/株式会社コウトク水産

株式会社 アキラ水産

◆鮮魚卸業◆

福岡鮮魚市場のコア企業!! 21世紀の水産業界を領導するアキラグループ

代表取締役社長 児玉 和久
本社 福岡市博多区東比恵三丁目二四一九
〒812-0007 電話 092-48113100
東京支社 東京都杉並区高円寺南一丁目三
〒166-0003 電話(03)537815800
営業所 千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

建設コンサルタント
建設事業の計画・調査・設計・施工管理
ジ・アンドエス・エンジニアリング株式会社
会長 花田 勲

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第77回

同時代から見た頭山満

(21)

―書と人物―

山浦貫一著『政局を繞る人々』(大正十五年、四海書房。社名は社長の名・四海民蔵に由来する)に「浪人の巨頭・頭山満」という一節がある。山浦は当時、東京日日新聞(現・毎日新聞)記者。

だんまり屋で押し通す頭山満の談話をとるのはむずかしい。山浦記者はまずかたわらのY氏に話しかけ、頭山が乗ってくるのを待つが、これは見事失敗と認めている。「先生の門人」Y氏はおそらく頭山満秘書・山本倬也(玄洋社員)であろう。(以下、引用)

◆ 霊南坂の小邸を焼け出された翁は、赤坂黒田侯のそばの小さいもた屋の二階に鎮座していた。

「なりますか」「いやなかな」「書は余程お習いになったのでしょうか」とY氏に問うが如くして先生に質問する。

「習やせん。言語道断の字じゃが、書けというから書くまでじゃ、根が無精者じゃからね」

Y氏の註に曰く。先生は全く生れつきの無精者だが気が強い。誰かの様に禅もやらなければ、健康術をやる訳でもない。生れた時から今日まで、気でもって来たんだという。それで、演説というものとは一度もしたことがない。(そこで翁は口をはさんで「やらのじゃない、出来んのじゃ」と説明した)口をきくことも無精である。フンフンと聞いているだけである。無精もこの位徹底すれば大したもののである。(略)

「先生、碁はどれ程？ 犬養さんとうのですか」「ウム、犬養に先二ツじや、我流で習ったことのない碁じゃ。」

(略) 辞する時、無精な翁がわざわざ二階から

玄関まで送ってくれた。恐縮の至りである。入るときにまごついたので、また見なおしたが、丸木の門には頭山とも玄洋社とも標札がない。軒頭にも何も書いてなかった。

◆ 霊南坂の頭山家は関東大震災に全焼した。それで旧藩主黒田家の縁を頼って仮住まいをしていたのである。そこに山浦記者が取材に訪れた。

揮毫依頼の紙が山積みになっていること(依頼する側が紙を持ち込むのだ)、その中に筑後出身の政治家・野田卯太郎の依頼も含まれていること、碁に興味があること、が書き留められている。門にも玄関にも表札がなかったのは仮住まいだったからだろう。ところで、『日本及日本人』一五三号(昭和三年)に、

「翁、客の辞去するあれば必ず起つて之を送る。屢々すれども決して労を厭わず。」

とある。客が去るたびに何度でも玄関先まで見送りに行く、というのだ。

頭山満は無口で知られている。その点では記者泣かせである。ところが、右の雑誌に、

「翁、婦人の訪問客に對すれば進んでもの言う。蓋し婦人の逡巡して所用を果さざらんことを慮るなり。」

とあった。相手が女性なら困らせないように進んでものを言った。

頭山満が東京で初めて書いた字については次の証言がある。

「俺が東京で字を書いたのは、杉浦(重剛)に頼まれた時が最初じゃ。杉浦が不言帖とかいうものを持って来て、俺に字を書けと言うから、字を書くのは貴方などのする事で、俺は字なんて書けないと言うと、イヤ是れに書いて貰う人は決めてあつて、勝海舟と其外四五人しかないので、貴方が今日書いて呉れなければ何遍でも頼みに来るつもりじゃ、どうせ書くなら今日書いて呉れというので、俺が蚯蚓ののたくったような字で、不信心通不言天とか何とか

書いた。あれが俺の字を書いた最初じゃ。」(『大日』二二三二号、昭和十五年)。「心を言わざるは天を言わざるに通ず」だろうか。杉浦の「不言帖」に掛けたもの。

『大日』二九八号(昭和十八年)「頭山満翁の言葉」に、「瀧田塾にかよつとつたところ、大変字の上手な塾生がおつて、それに負けまいと稽古したが、一向ものにならぬ。字は俺が一番下手じやつた。」とある。

ところが瀧田先生がお前のは荻生徂徠の書風がある、と励ましてくれた。それで思いついて同じ字を何百ぺんも稽古した。

「暁という字じゃ。そこでこの暁という一字はわしが一番の書き手になった。」

また、同二九三号に、出征の際「世間往々日の丸に題字を乞う者があるが、これは白地に一尊を表している所に意味があるので、俺はこれには書かぬことにしている。」とある。白襷には書いた。